博物館だより

№136　2024.　4.　1　発行
大阪大谷大学博物館
富田林市錦織北３丁目 11 － 1
TEL（0721）24 － 1039

令和６年度春季特別展

大とんだばやし展 －埋文調査の歩みとこれから－

令和６年４月８日（月）～６月２９日（土）
主催：大阪大谷大学博物館・富田林市

大阪大谷大学が立地する富田林市には、縄文時代から近世にかけての数多くの遺跡が分布しています。それらの遺跡で行われた発掘調査によって、往古の人々の息づかいが感じられる貴重な品々が見つかっています。

富田林市における本格的な調査は、1959・60（昭和 34・35）年に行われた大阪大学と大阪府教育委員会による新堂廃寺跡の発掘調査に始まります。昭和 40 年代からは徐々に宅地造成などの開発が増え、昭和 50 年代以降は富田林市教育委員会が調査主体となって、発掘の件数も急激に増加しました。また、大阪大谷大学の前身である大谷女子大学も、市内にある中野遺跡などで発掘調査を行い、多くの成果を上げてきました。それらの成果は、『発掘調査報告書』や『富田林市史』といった刊行物を通じて、広く公開されています。

今回の春季特別展は、大阪大谷大学博物館と富田林市の共催事業として、これまでの発掘調査によって蓄積されてきた膨大な資料のなかから、それぞれの時代を象徴する出土遺物を展示しています。この特別展を通じて、新たな富田林の歴史像をみなさんの心の中に描いてもらう機会になれば幸いです。

写真１　大谷女子大学による中野遺跡の調査風景（1979 年）

序章　唯一無二のテキスト

『富田林市史』の前身として、1955 年刊行の『富田林市誌』があります。まだ発掘調査のなかった時代でしたが、採集遺物を紹介しています。

1969 年に始まった富田林市史編さん事業では、考古編の写真図版を収録した第４巻を先に刊行し（1972 年）、本文を収録した第１巻は 1985 年に刊行しました。この間、府内全体における開発は著しく、緊急の調査で得られた知見によって、より詳しい歴史像が描けるようになったのです。

その後、市内で発掘調査は進み、新知見は蓄積され続けていますが、富田林の歴史を学べる教科書として、『市史』は今も不動の地位にあります。

第１章　遺跡の広がり

2024 年の遺跡分布図（８頁）をみると、市域中央を縦断する石川の両岸と、その背後の丘陵を中心に、多くの遺跡が存在することが分かります。

こうした事実は、最初から分かっていたわけではありません。この元となる分布図の作製にあたって中心を担ったのは、河南高校および富田林高校の両考古学クラブ員たちでした。1971～76 年の６年間にも及ぶ分布調査では、市域を一辺 200m のメッシュに区切ったカードをつくり、遺物が落ちていないかを歩いて調べ、結果を書き込んでいきました。遺跡の数は調査前から約５倍も増え、その成果をまとめた『富田林市の埋蔵文化財』が、1978 年に完成しました。

第２章　埋文調査のはじまり

市内における最初の埋蔵文化財（埋文）の発掘調査は、1959 年に新堂廃寺跡で行われました。府営住宅の建設に対する試掘調査でしたが、保護のために主要遺構部分を工事範囲から外したことは、その後の史跡保存への第一歩となりました。

しかし、これを皮切りに市内各地の丘陵部で宅地造成が相次ぎ、多くの遺跡が破壊されていくことになります。このころはまだ、富田林市の文化財行政が整っておらず、大阪府や教育機関、研究者などが緊急の調査を担当しました。

平（ひら）１号・２号墳では、河南高校および富田林高校の考古学クラブが保存運動を行いましたが、破壊を免れることはできませんでした（写真２）。

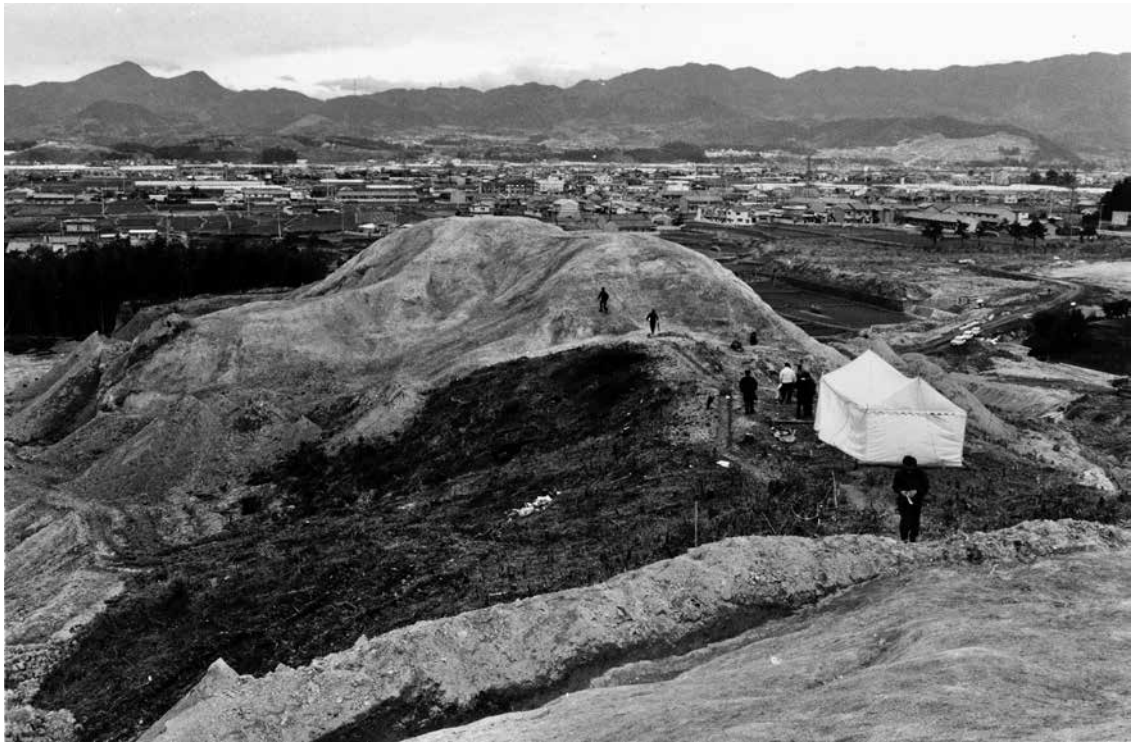


写真２　大阪府による平１号・２号墳の調査風景（1972 年）

真名井古墳　現在の南旭ヶ丘町に存在した南河内最古級の前方後円墳で、４世紀初めごろの築造です。展示した鏡は、出土した実物から鋳型をとって再現されたものです。埴輪は、古墳のかつての呼び名「十三本松山古墳」と記されたラベルと共に保管されていたもので、1961 年に行われた緊急の調査以前の採集品と考えられます。

宮前山１号墳　真名井古墳のすぐ西側に存在した、７世紀の終末期古墳です。1960 年の緊急の調査後に消滅しましたが、埋葬施設の横口式石槨は大阪大学（豊中市）に移築され、府指定文化財になっています。耳環は現存する唯一の副葬品で、土地所有者によって長年大切に保管され、近年に市に寄贈されたものです（写真３）。

写真３　宮前山１号墳の耳環

中野遺跡　1979 年、中野遺跡内で開発が計画され、発掘調査が必要になりました。同遺跡では、前年に大谷女子大学が博物館実習の一環で学術的な発掘調査を行っていたため、富田林市は同大学に調査を委託しました（写真１）。調査報告書はそれぞれの名義での刊行となり、市の名義分は記念すべきシリーズ１冊目の報告書となっています。

第３章　『市史』を形づくった遺跡

『市史』の考古編は、古墳時代に多くの紙面を割いています。1960 年代以降の開発の多くが、古墳のある丘陵部で行われたことが大きな要因です。このころは市内の遺跡の分布状況がよく分かっておらず、古墳のように目に見える埋文とは異なり、埋もれている集落跡を予測して緊急の調査をすることは、難しかったと考えられます。

遺跡分布図が完成した 1970 年代後半からは、開発に対応して集落跡の発掘調査も進み始めましたが、『市史』の執筆は終盤にさしかかっていました。ここでは、刊行後の調査成果も援用しながら、『市史』で示された当時の歴史像について、時代順に振り返ってみたいと思います。

（１）旧石器・縄文時代

旧石器時代の実態は現在でもほとんど明らかになっていませんが、1981 年度の中野遺跡の発掘調査では、後期旧石器時代（約 20,000 年前）のものとみられるナイフ形石器が出土しています。

続く縄文時代では、古くから錦織遺跡が知られており、1967 年には富田林高校の生徒が、縄文時代前期（約 6,000 年前）の土器を発見しています。その後、錦織南遺跡の発掘調査では、自然流路内から晩期（約 3,000 年前）の土器などが出土しましたが、具体的な生活の様子をうかがえるような遺構は見つかりませんでした（写真４）。

写真４　錦織南遺跡の縄文土器

（２）弥生時代

喜志遺跡および中野遺跡では、二上山に近いという地の利を活かし、そこで産出するサヌカイトを用いた石器製作が盛んに行われていたことが、古くから知られていました。また、現在の国道 309

号開設とその周辺開発に伴う甲田南遺跡の発掘調査では、集落跡が新たに見つかりました。

これらの段丘上の集落は、弥生時代中期（紀元前２世紀～紀元後１世紀）に大きく栄えますが、後期に入ると一斉に姿を消します。それと入れ替わるように、石川東岸の丘陵上には、彼方遺跡などで高地性集落が出現します。

喜志遺跡　製品だけでなく、製作途中の未製品、打ち欠いた際に出る石くず、採石時の原石に近いものまで、膨大な量のサヌカイト製石器が出土しており、集落内で製作されていたことが分かります（写真５）。隣接する喜志西遺跡では、周囲を溝で区画した方形周溝墓が見つかっており、喜志遺跡で暮らした人びとが葬られたと考えられます。

写真５　喜志遺跡のサヌカイト製石器

（３）古墳時代

真名井古墳に代表されるように、４世紀代（古墳時代前期）には石川西岸の羽曳野丘陵を中心に、盛んに古墳が造られました。東京国立博物館には、板持丸山古墳の鏡や廿山古墳の矢じりが保管されており、首長の威容を垣間見ることができます。しかし、それらに対応する時期の集落跡は少なく、古式土師器と呼ばれる３～４世紀の土器自体が、市内ではあまり出土していません。

中期（５世紀）に入ると、一転して古墳の数や規模は目立たなくなり、後期（６世紀）も変わらない状況が続きます。

宮林古墳　1970 年代の分布調査で「古墳の可能性あり」と推定され、『市史』刊行が迫る 1983～84 年の発掘調査で、前期の方墳であることが判明しましたが、住宅建設により消滅しました。副葬品は多くありませんでしたが、出土した鉄製の矢じりの根元には有機物がよく残っており、装着の方法がわかる貴重な資料です。

川西古墳　市内で数少ない中期の古墳の一つで、昭和初めまでは墳丘が残っていました。出土したよろいなどの副葬品が、京都大学などで保管されています。古墳は現在の甲田南遺跡と錦織遺跡の境目付近にあったようで、両遺跡から古墳に並べられていた埴輪が出土しているほか、円筒埴輪を棺に利用した埴輪棺も見つかっています。

中佐備窯跡　中期に入ると、朝鮮半島からの技術の伝来により、泉北丘陵に多くの須恵器の窯が造られました。中佐備では窯本体は残っていませんでしたが、失敗品とみられる須恵器が大量に出土しました。なお、市内にも渡来人が居住していたようで、朝鮮半島南部でみられる特徴をもつ韓式系土器が、別井遺跡などで出土しています。

（４）飛鳥・奈良時代

権力の象徴が古墳から寺院へと移る飛鳥時代、南河内にはたくさんの古代寺院が造られました。

南河内最古級の寺院跡である新堂廃寺跡は、昭和の調査で一直線に並ぶ講堂・金堂・塔などが見つかりました。これらは奈良時代の再建後の姿で、創建時の飛鳥時代の伽藍は不明とされてきましたが、平成の調査により、創建時から四天王寺式伽藍配置であることが分かっています（写真６）。

新堂廃寺跡の背後には、瓦を焼いたオガンジ池瓦窯跡や、埋葬施設の護岸に平瓦を用いたお亀石古墳があり、三者の密接な関係がうかがえます。

新堂廃寺跡　伽藍の変遷が判明した平成の調査を経て、2002 年に国史跡に指定され、史跡整備に向けた検討を現在進めています。遺跡の価値が定まった一方で、遺構の細かい部分の復元には課題も多く、遺跡名が示している通り、寺院の本来の名称すらも分かっていません。いまだに謎の多い、「名もなき」古代寺院です。

オガンジ池瓦窯跡・お亀石古墳　新堂廃寺跡とセットで、国史跡に指定されています。オガンジ池瓦窯跡は、『市史』刊行直後の 1985～86 年、池の改修に伴って二度目の発掘調査を行いました。

写真６　新堂廃寺跡の軒丸・軒平瓦

1969～70 年の発掘調査で見つかっていた奈良時代の窯の下位から、飛鳥時代にさかのぼる窯が見つかったほか、瓦質の棺の破片も出土しました。お亀石古墳で使うためのものだったのでしょうか。

細井廃寺とその周辺　錦部（にしごり）郡の古代寺院である細井廃寺と、終末期古墳の南坪池（みなみつぼいけ）古墳から出土した、現代のレンガにあたる塼（せん）の表面には、同心円のスタンプ状の文様がみられます。同様のものは、錦織遺跡や錦聖（きんせい）遺跡など周辺の集落遺跡にも散布しており、細井廃寺と関わりがあった地域の範囲を知る手がかりとなっています。

第４章　『市史』刊行後のトピック

『市史』刊行後も、途切れることなく続けられてきた埋文の発掘調査は、多くの新知見をもたらしました。それらは、『市史』刊行時にモザイク状だった歴史像を、より鮮明にしたといえます。

その一方で、ほとんどが依然として開発に伴う調査であるという事実を、決して忘れてはいけません。華やかな新発見の裏側で、「記録保存」と引き換えに多くの埋文が失われているのです。

ここでは、『市史』刊行後に明らかになった特筆すべきトピックを、５つ紹介したいと思います。

（１）見えてきた縄文人のくらし

宅地造成に伴う 2014 年度の喜志南遺跡の発掘調査では、市内初の発見が一度に３つもありました。①縄文時代後期から晩期の長期間（約 3,500～2,500 年前）にわたる土器が見つかったこと、②縄文時代の大量のサヌカイト製石器が出土し、喜志地区での盛んな石器製作が縄文時代までさかのぼったこと、③穴に据えられた土器棺とみられる土器が見つかったこと、です。

これまでは遺物が出土するだけだった市内の縄文時代ですが、その暮らしぶりが徐々に浮かび上がってきました。

（２）変わる５世紀のイメージ

後にかがり台となる宅地造成に先立ち、1996 年度に山中田（やまちゅうだ）１号墳が発見されました。羽曳野市・藤井寺市に古市古墳群が造られ始める時期にあたる古墳で、関係が注目されましたが、それに続く特筆すべき古墳は見つかりませんでした。

古墳時代中期の市内は、古墳づくりが低調というイメージが長年続きましたが、近年に喜志南遺跡で相次いで出土した埴輪により、覆されつつあります。大王墓と遜色のない大型の円筒埴輪や、豊富な種類の形象埴輪群から、古市の王権と密接に関わっていた集団の存在が見えてきました。

写真７　山中田１号墳の勾玉

山中田１号墳　佐備川の支流、宇奈田川（うなだがわ）の東側の丘陵は、古墳時代前期から飛鳥時代の長期間にわたって、多くの古墳が造られ続けた特異な地域です。中期初めに造られたこの古墳は、墳丘の規模が大きくないにもかかわらず、よろいや腕輪、600 点以上もの玉といった豪華な副葬品が、埋葬された当時の状態で出土しました（写真７）。

写真８　浮ヶ澤古墳の形象埴輪（盾形）

喜志南遺跡　2014 年度発見の喜志南１号石室は、古墳時代後期以降に造られたと考えられます。石室床面に敷き詰められた円筒埴輪片は、それより古い中期前半に作られたもので、付近に存在した別の古墳（2024 年度発見、方墳か）に並べられていたものを再利用したようです。

また、2021 年度発見の浮ヶ澤（うきがさわ）古墳は中期末の前方後円墳で、周溝外側に並べられていたと思われる形象埴輪群が出土しました（写真８）。

（３）シルクロードにつながる玉

廿山南（つづやまみなみ）古墳は、石川西岸の丘陵に造られた古墳時代後期の円墳で、2001 年度にほかの玉に混じって、連珠状の非常に小さい玉が出土しました。奈良文化財研究所で分析したところ、ガラスは二重構造で、ガラスとの間に銀箔がはさまれた重層ガラス玉であることが分かりました（写真９）。

その後、科学分析の進展に伴い、2017 年に同研究所で再調査したところ、西方アジア（カスピ海より東側の地域）で生産されたことが分かりました。この分析結果が古墳の再評価につながり、出土遺物は一括で市指定文化財（考古資料としては第１号）になりました。

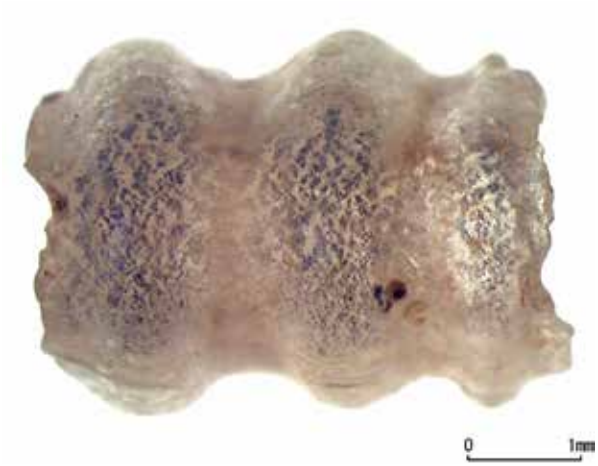


写真９　廿山南古墳の重層ガラス玉
［市指定文化財］
※青色に見えているのが、風化した銀箔。

（４）古代の富田林市役所

近年、市営住宅の建て替え等に伴う発掘調査で、畑ヶ田・畑ヶ田南遺跡が存在感を増してきました。飛鳥時代のすずり、奈良時代の銭貨を納めた土器、ベルトの石飾りといった一般集落では見つからない遺物が、相次いで出土したのです。すずりなどは北側の中野遺跡でも出土していましたが、大型建物跡も見つかったことで、石川郡の官衙（役所などの公的施設）跡である可能性が高まりました。

錦部郡では、飛鳥時代以降の大型の掘立柱建物が複数見つかっている錦織南遺跡が、その中心地であった可能性があります。

（５）埋文調査からみた中世・近世

『市史』の考古編では扱われなかった中世・近世についても、少しずつ発掘調査が進んでいます。

中野北遺跡では、段丘崖近くで室町時代の大型の堀が見つかっています。屋敷と城郭を兼ね備えた城館跡とみられ、こうした遺構は市内各地に存在することが分かっています。また、隣接する中野遺跡では、室町時代の和鏡２面が、鏡面同士が合わさった状態で出土しています（写真 10）。

富田林寺内町遺跡では、寺内町が成立した室町時代末よりも前の状況や、その繁栄とともに町が拡大する様子を示す遺構・遺物が見つかっています。また、現在にも残るその町並みは、重要伝統的建造物群保存地区に選定されています。

写真 10　中野遺跡の合わさった和鏡

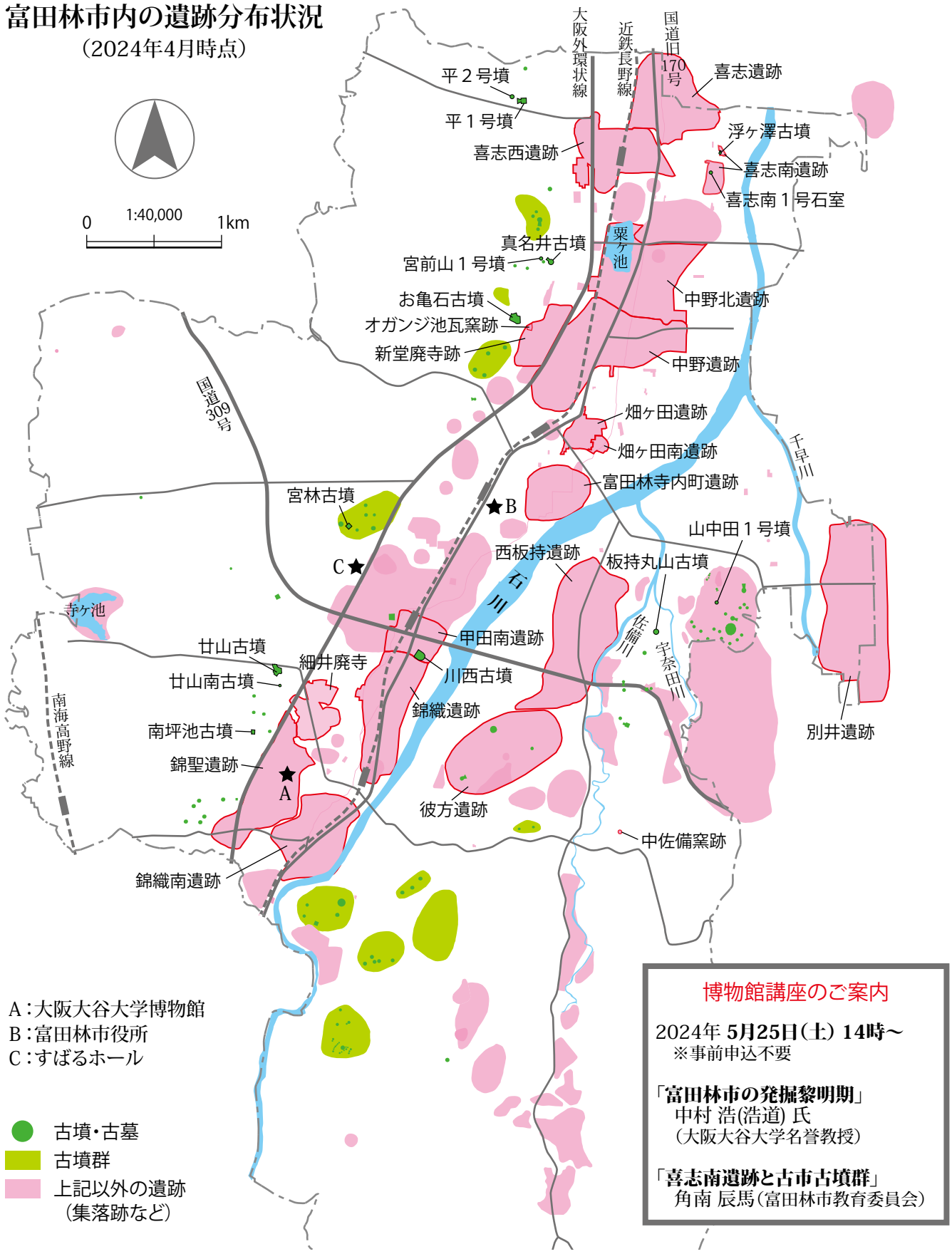
終章　埋文調査のこれから

本市の収蔵室には、高く積んだ整理コンテナが所狭しと並んでいます。そこに入っている遺物は、まちの開発とともに歩んできた発掘調査で出土したものばかりです。きっとみなさんが思っている以上に、「埋文」は身近なところに存在します。それゆえに、発見に直面した時、そこに関わる人びとが「みんなで保護していこう」という意識をもたなければ、貴重な文化財を次世代に伝えていくことはできません。

本市では、既存施設を活用した実物資料の展示に加え、「おうち de ミュージアム」によるデジタル化した資料の公開や、出前講座も行っています。こうした事業によって、みなさんの埋文に対する関心が高まっていくことを願っています。

富田林市内の遺跡分布状況

（2024年4月時点）



博物館講座のご案内

2024年 **5月25日（土）14時～**
※事前申込不要

「富田林市の発掘黎明期」
中村 浩(浩道) 氏
（大阪大谷大学名誉教授）

「喜志南遺跡と古市古墳群」
角南 辰馬（富田林市教育委員会）

大阪大谷大学博物館

2024年４月１日発行

所 在 地　富田林市錦織北3丁目11－1　　電話（0721）24－1039
http://www.osaka-ohtani.ac.jp/
交通の便　近鉄長野線「滝谷不動」駅下車、徒歩約7分
開館時間　午前10時～午後4時
休 館 日　日曜日（５月26日と６月23日は開館）、祝日（４月29日は開館）
５月７日（火）・８日（水）・29日（水）、６月20日（木）